

「シリア・フェニキアの女の信仰」

2022年02月04日

イエスは言われた。「まず、子どもたちに十分食べさせるべきである。子どもたちのパンを取って、小犬に投げてやるのはよくない。」女は答えて言った。「主よ、食卓の下の小犬でも、子どものパン屑はいただきます。」そこで、イエスは言われた。「その言葉で十分である。行きなさい。悪霊はあなたの娘から出て行った。」女が帰ってみると、その子は床に横たわっており、悪霊は出てしまっていた。(マルコ福音書7章27節～30節)

主イエスは、ガリラヤから北西にある地中海に面した異教のティルスの方角に行かれた。ファリサイ派の人々の執拗な迫害からの逃避行であった。だから、ティルスでは、人に知られたくないと、家に隠れ、身を潜めておられた。ところが、主イエスが来られたことが人々に気付かれてしまった。シリア・フェニキア生まれのギリシア人で、汚れた霊に取りつかれた娘を持つ女が、主イエスのことを聞きつけ、足元にひれ伏し、娘に取りついた悪霊を追い出してほしいと懇願した。主イエスが悪霊を追い出されるという噂が、異教のティルスまで聞こえていたのである。彼女は今まで、子どもの回復を願って、色々な手立てを尽くしたであろうが、回復しない。伝え聞いた主イエスの癒しを信じ、必死の懇願をしたのである。主イエスは「まず、子どもたちに十分食べさせるべきである。子どもたちのパンを取って、小犬にやるのはよくない」と応じられた。「子どもたち」はユダヤ人のことで、「パン」は神の恵み、この場合は、悪霊を追い出す力を指している。ユダヤ人は神を知らぬ異教徒を汚れた「犬」と言って軽蔑していたが、「犬」に「小」をつけた「小犬」は、彼女への軽蔑を多少和らげている言葉である。ユダヤ人に対し十分な恵みを与えるべきで、その恵みを異教徒のあなたに与えるのはよくないと、彼女の懇願を拒絶された訳である。すると彼女は、「主よ、食卓の下の小犬でも、子どものパン屑はいただきます」と食い下がった。母親は子どもを愛し、子どものためなら何でもする。母親の愛が、あなたがたユダヤ人から見れば、私は汚れた「小犬」でしょうが、その小犬も、子どもたちが食卓から落としたパン屑はいただきますという、謙虚で、諦めない言葉を生んだのである。主イエスは彼女の言葉を聞いて、「その言葉で十分である。行きなさい。悪霊はあなたの娘から出て行った」と宣言された。彼女が家に帰ってみると、娘は床に横たわり、悪霊は出てしまっていた。主イエスが病人を癒やし、悪霊を追放する奇跡は、直接、言葉をかけたり、触れたりすることによって起こっているが、シリア・フェニキアの女の場合、離れたところで、言葉によって、彼女の娘から悪霊を追放したと記している特異な奇跡である。マルコ福音書の著者は、主イエスの言葉は時空を超えると捉えている。

主イエスと母親との対話で、まず、ユダヤ人に対して神の恵みが注がれるべきだという言葉は理解できる。主イエスは、神の民の救済のために遣わされたのであるから、ユダヤ人優先は当然である。しかし、「小犬に投げてやるのはよくない」と異教徒を拒絶された言葉には、異教徒を受け入れた主イエスのものとは思えない節がある。「小犬」と可愛らしく言って、拒絶を超えて、更に、深く強い願望を引き出そうとしたとも取れよう。しかし、彼女の「小犬でも子どものパン屑はいただきます」との言葉を聞いて、異教徒の信仰に触れ、主イエスご自身が、異教徒の壁を突き破る教えを受けたとも受け取れる。イエスもユダヤ人優先思想を持っていたが、彼女の言葉から、民族の垣根を取り除くことを学び、変えられた。人の子イエスは彼女との出会いによって成長した出来事と、私は受け止めたい。